

私も若槻の住民です



若槻の皆さん、若槻団地に住む野口 清人(のぐち きよと)と申します。仕事は映像作家。あまり聞きなれない職業かもしれませんね。少し説明させてください。

県内民放初のテレビマン

私はSBC・信越放送の社員でした。1958年、ちょうどSBCがテレビ放送を始めた時の入社で、文字通り「開局要員」。入社早々、キー局の東京放送(TBS)へ研修に行き、そこでテレビ放映に関する殆んどすべてを勉強しました。

取材、原稿の書き方、カメラの操作、現像、編集そしてオンエア…。何でもひとりで出来るように訓練しました。SBCへ帰ってからも同期の仲間たちと、「獅子奮迅」の働き！？。自分で言うのもおこがましいですが。

こうした境遇を与えられたことが定年後の仕事に大いに役立ち、【映像作家】と名乗ることにしました。

最近の仕事で印象深いのは作曲家・中山晋平の生涯を映画化した

『うら、歌は流れる 中山晋平物語』(2007年)です。脚本・演出を私がやり、地元住民の力を結集して作るというコンセプトから、市民の応援や俳優も素人でやりました。晋平の出身地の中野市に入り込んでいるうちに、隠れたエピソードにも触れました。

晋平は東京音楽学校(現東京芸大)のピアノ科出なんですけど、「ピアノ」が苦手だったらしい。作曲の時は右手の人差指でポロン、ポロンと…。あるいは、彼一流のジョークかもしれません。

隠れたエピソード

一昨年には、1933年2月4日に起きた県下の教員赤化事件にかかわる『草の実』という作品もあります。共産党などの関係者が大量に検挙され、そのうち大勢が教員でした。「2.4事件」とも呼ばれています。

名作「二十四の瞳」を書いた壺井栄さんと会う機会があり、あれこれ話が弾みました。小説は12人の子どもと先生が主役。木下恵介監督による映画でも感動的に描かれ、誰もがタイトルの“二十四”は子どもの目×12=24と。

壺井さんはこんなことを洩らしました。「2.4事件」を危惧し「子どもが真っすぐに育ってくれればよいが」と信州教育への影響に心を痛めていました。壺井さんの思いが、瞳とは別に”二十四”の裏側に秘められていたようです。因みに「二十四の瞳」は壺井さんが県内に逗留中に書かれた作品です。



地域に根差して

若槻団地には、県企業局の造成後直ぐに住みました。今や後期高齢者です。生まれは京都ですが、学童疎開で奈川村(現在松本市)に越し、松本深志高校から信州大学文理学部と、ほとんど信州人です。信州の良さ、延いては若槻にも言えますがやはり自然の豊かさが魅力です。

現役時代には、取材のため県内の市町村は全部回りました。

そうした縁からふるさとを映像化してほしい—といった申し出もあります。一例として、牟礼村(現飯綱町)の「歴史ふれあい館」で上映している作品の多くは私が作りました。

「北国街道」が若槻地区を通過してから400年になるそうですね。コミュニティわかつきの会長さんが先頭で行事の計画を練られているとか、楽しみです。私も住民として協力は惜しみません。

(構成 広報委員長)